東京の会通信

No.282

2019年1月1日号
（隔月1日発行）

発行：骨髄バンクを支援する
東京の会
〒162-0065 東京都新宿区
住吉町10-8 第1菊池ビル302号
TEL：03-3354-6377
（FAX兼用）
http://www.marrow.or.jp/tokyo/
e-mail:marrow_tokyo@yahoo.co.jp
定価 100 円

チャリティコンサート「響」は大成功

11月４日、東京の会恒例のチャリティコンサートが開催されました。昨年まで「バラのかおりのコンサート」と題して虎ノ門の発明会館で行われていましたが、今年は本郷の求道会館に場所を移し、コンサート名も「骨髄バンクチャリティコンサート『響』」となりました。コンサート名は会場の求道会館の音の響きが素晴らしいことから定例会で決まりました。

演奏者は昨年までと同じ、小澤洋介さん（チェロ）、三戸素子さん（バイオリン）、高田匡隆さん（ピアノ）のお三方で、今年はベートーヴェン、マルタン、ブラームスの作品３曲が演奏されました。

今年の会場となった求道会館は、大正時代に建てられた洋風の煉瓦造の建物で、内装は木が多く使われ窓にはステンドグラスがはめ込まれており、一見するとキリスト教会のようですが、実は仏教の教会堂で正面の壇上の六角堂には仏像が安置されています。歴史の重みを感じる厳かな雰囲気のなか、ピアノ三重奏の繊細でかつ力強い音楽が会場全体に響き渡り、詰めかけた聴衆のみなさん、そして東京の会のスタッフも深い感動に包まれました。

求道会館は２階席まで満席

演奏の合間に行われたミニシンポジウムでは、骨髄移植経験者の光江健太郎さんと池谷有紗さんが闘病体験を語り、骨髄バンクの意義を訴えました。会場の聴衆の皆さんの心にもお二人の話が響いたのではないかと思います。私たちも自分たちの活動の意味を再確認することができました。

今年のコンサートのチケットの売上げは好調で、会場の収容人数との関係でお断りした方も多く、申し訳ありませんでした。会場入口では、東京の会の松下さんの手作りのグッズや三瓶代表が理事長を努める福祉作業所のクッキーも販売し、完売しました。収益金および寄付金は、骨髄バンクおよび患者支援活動に活用させていただきます。

演奏者のみなさん、素晴らしい演奏をありがとうございました。そしてチケット販売や準備に奔走された東京の会のみなさん、お疲れ様でした。　（二見茂男）

▶求道会館に響いた東京の会の思い

11月４日に文京区の求道会館にて、骨髄バンクチャリティコンサート「響」が無事に終了しました。終わってみれば、演奏が素晴らしかったのはもちろんですが、チケットは完売、当日の運営も滞りなく、会場も好評で大成功だったと思います。ミニシンポジウムにも、皆さん深く心を動かされたようでした。

しかし今回、この素晴らしい会場でコンサートを開催するために、東京の会メンバーは紆余曲折を乗り越え、手探りで準備をしながらようやくこの日を迎えることができたのです。

今まで数年にわたり使わせていただいていた発明会館ホールが周辺の再開発事業により閉鎖されることに

日本骨髄バンクの登録患者と検査済登録ドナー
（平成30年11月末日現在）

	ドナー（全国）	ドナー（東京）	患者（全国）
登録者累計	493,717	60,238	55,258
10-11月登録分	7,080	930	503
10-11月抹消数	3,385	406	－
実質登録増	3,695	524	－

患者とドナー登録・適合状況（11月末日現在）

ドナー登録受付者数（累計）	755,615人
ドナー登録抹消者数（累計）	261,898人
HLA適合報告ドナー数（累計）	301,895人
実質登録患者実数（現在）	3,490人（国内1,345人）
HLA適合患者数（累計）	43,994人（患者累計数の79.6%）
非血縁移植実施数	22,626例（10-11月実施227例）

なり、1年前から会場探しが始まりました。公共のホールは地元優先で、外部抽選は不利な上に手間も労力もかかります。メンバーが奔走の末に見つけてきた民間のホールに一度は決まりましたが、出演者の三戸さんから「素晴らしい場所がある」と提案があり、紹介されたのが求道会館でした。

求道会館は大正時代に建てられた仏教の教会堂を改修復元した歴史的建造物で、現在は東京都の有形文化財に指定されています。吹き抜けで音響効果が素晴らしく、木がふんだんに使われた内部は大きく包み込むような響きで、三戸さん達が惚れ込んだ理由がよく分かりました。

場所が決まりチラシが刷り上がって、いよいよ本格的な準備の始まりです。しかしホールのような固定座席があるわけではなく、チケットを何枚売ったらいいのかもわかりません。ロビーがないのでグッズ販売はどこでやろう、雨が降ったら傘立てが足りない、靴を脱いでいただくので帰りに履き間違いがないようにしなければ、と次々に湧いてくる心配事の数々。

右から司会の甲斐さん、光江さん、池谷さん

客席目の前でトリオの渾身の演奏

でも幾多の課題も、東京の会のチームワークと事務局で頑張ってくれた仲間たちの知恵と工夫と実行力で乗り切ることができました。出演者の方達も、周りでガタガタと準備をする中でのリハーサルに文句も言わず協力して下さり、プロの集中力に感服しました。ただ、私達にとってはこれ以上ない最高のBGMとなり、「ああ、なんて贅沢なんだろう」と幸せを噛みしめながらの作業でしたが。

打ち上げはスタッフも出演者の皆さんも達成感に溢れ、全員がこの会場にして良かったと満足していました。既に来年のスケジュール調整が始まっており、きっとまた、皆さんを素敵な響きの会場にご案内することができるのではないかと思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。（福永達子）

今年も、代々木公園に雪が降りました！

◘若者たちがお祭ムードで盛り上がり

温かい秋の日、11月10日、スノーバンク〈東京雪祭〉の初日、ボランティアに参加しました。毎年のことながら若い人たちが大勢集まって、本当にお祭のようです。

代々木公園にはスノーボードのジャンプ台が作られ、真白な雪が敷き詰められています。そのまわりには、献血車やテントが張られ、いろいろな店舗が並び、つい買いたくなる品物がいっぱいです。私は特に和菓子屋さんのとら焼（どら焼ではなく虎焼）に興味がありチーズあん大福ととら焼を買って、イベント前に食べてしまいました。

ジャンプ台では次々とスノーボードの競技が続き、舞台ではロックの音楽が響き、お祭ムードが盛り上がります。私は説明員ではないので、のぼりを持ってドナー登録と献血の呼びかけをして歩きました。子供を連れた若い夫婦たちの姿は、孫がおらず高齢化のすすむ街に住むわが身には眺めるだけで楽しめました。

若者が続々登録

ますます陽ざしは温かさを増して、雪がとけていきます。今年の目標は、骨髄バンクドナー登録者が111名、献血は222名だと言われ、到達できるのか心配になりましたが、翌日の11日に結果を託して、帰路につきました。そして後日発表された結果報告を知って、皆様に心から感謝しました。来場者数は60,000人以上、骨髄ドナー登録者数117名、献血実施数238名です。

献血ドナー受付

とてもうれしい数でした。また来年も頑張りましょう。

（大塚礼子）

◘親子で東京雪祭参加、ドナー登録呼び掛け

11月11日、代々木公園で行われたスノーバンク〈東京雪祭〉に、なかなか会えない次男坊を連れて参加しました。去年参加できなかった私は日赤の献血バスが４台も来ているのと、人の多いことにびっくりしました。イベントの規模が確実に拡大していました。

突然参加することになった次男坊を仲間に紹介すると戸惑いながらも会場での献血とドナー登録を呼びかけてくれました。私はドナー登録の説明をしたり、献血バスに乗り込む若いママのために、ちょっとの間赤ちゃんの子守りをしたり、仲間とともに臨機応変に動きました。

最後の追い込みで、みんなで30分延長して頑張った結果、目標の111人に対して117人のドナー登録を達成しました。その忙しさの中でも隣で雪を滑り見事に着地した「けんけつちゃん」を見ることができたので個人的には満足です！

東京の会や他県のボランティアのみなさんが、初めて参加して何もわからずにうろうろする息子に温かく接し、声をかけて下さいました。親子の会話は余り出来ませんでしたが、素晴らしい体験をさせていただき、本当にありがとうございました。　（竹崎恵子）

プルデンシャル生命の皆さんの熱い応援をいただきました！

例年箱根駅伝を通じて骨髄バンクをご支援いただいているプルデンシャル生命保険株式会社様では、年に一度拠点毎にインターナショナルボランティアデーが設けられ、様々な社会貢献活動を行っています。千代田第六支社では骨髄バンクと献血推進がテーマとして選ばれ、10月25日朝、営業担当者14人が事務所に集合し、まずオープニングセレモニーが行われました。

大谷貴子・全国協議会顧問の挨拶に続き、学生時代駅伝ランナーで同社と骨髄バンクの接点の契機となった大橋一三さんのドナー体験談、バンクからの骨髄移植で白血病を克服された池谷有紗さんの闘病談及び提供者への深い謝意が語られ、骨髄バンクへの理解が更に深まると同時に、参加者のボランティア意欲昂揚に繋がりました。

プルデンシャル生命の方々と

その後有楽町献血ルームへ移動し、14人が３箇所に分かれて献血の呼びかけを行いました。若い方ばかりで、威勢のいい声と爽やかな姿勢に、有楽町駅前の通行人も好感を抱いたはずです。我々東京の会スタッフは、社員各位へのドナー登録説明及び活動支援、午後は献血に来られた方への登録説明を行い、プルデンシャル社員の方々も含めて平日登録会では最多の20人にご登録いただきました。ありがとうございます。

献血ドナー登録呼び掛け

筆者も勤務先のボランティア休暇制度を利用しての参加でしたが、我が国の企業と雇用者により広く社会貢献活動が伝播していくことを願ってやみません。

ご協力戴いた関係者各位に心より御礼申し上げます。

（松阪一紀）

東　京　ド　ナ　ー　登　録　会　予　定（1月・2月）

１月11日（金）日本赤十字社　本社
１月12日（土）ぽっぽ町田
１月14日（月）明治神宮
１月23日（水）晴海トリトンスクエア
１月24日（木）晴海トリトンスクエア
１月25日（金）都庁
１月25日（金）江東区役所

東京の会「1月、2月定例会」のお知らせ

1月26日（土）、2月16日（土）午後5時30分より
会場：全労済東京会館3階会議室
※JR新宿駅西口下車7分（新宿区西新宿7-20-8）
※地下鉄丸の内線西新宿駅下車1番出口徒歩2分
青梅街道新宿警察署向かい・「キャン☆ドゥ」角入り右側

※3月定例会予定・3月23日（土）午後5時30分より

3月会報発送「おりおり」のお知らせ

2月の「おりおり」はありません！
会報が隔月刊となったため、発送作業も奇数月のみとなります。
3月2日（土）13時00分より
※13時までは品川運輸さんが使用されています。13時以降にお越し下さい。
場所：品川運輸・4階会議室（品川区東大井2-1-8）
JR大井町駅徒歩8分・京浜急行鮫洲駅徒歩2分
※今お読みになっている「東京の会通信」を約500部折って封入して発送します。簡単な誰にでも出来る作業です。いつも人手が足りません。どうかご協力を。
※2019年5月「おりおり」予定・5月11日（土）13時00分より

新しい方大歓迎です。お気軽においで下さい。お待ちしています。

投稿

箱根駅伝の応援とプルデンシャル生命との長い絆

骨髄バンクを支援する東京の会　大橋一三

10月25日、プルデンシャル生命保険会社のボランティアデイに骨髄提供の経験談を話すために参加しました。場所は、神保町駅からすぐの千代田第６支社。オフィスに入ると社員の方たちが、暖かい拍手で迎え入れて下さり緊張がほぐれました。骨髄バンクボランティアとプルデンシャル生命は、10年以上にわたり活動を共にして深い関係があります。そして、実際に骨髄提供をされた社員の方が何人もいらっしゃいます。

日本で公的骨髄バンク事業が始まって８年目、骨髄提供後の私は、骨髄バンクの現状や患者さんの状況を新聞等で知りました。移植を希望し、ドナーが現れるのを待ち続けながら亡くなっていった患者さんがたくさんいました。不治の病と言われていた白血病ですが、助かる可能性を有する骨髄移植という治療法が確立されて、患者さんには未来を照らす大きな光となりました。しかし、治療法があってもドナーが見つからない為に、その希望に変わり残酷な現実を彼らにつきつけました。無念です。

当時、「ドナー登録者数30万人へ」をスローガンに骨髄バンク職員や全国のボランティアが目標に向かって活動をしていました。そんな中、私は友人と二人で箱根駅伝の沿道に骨髄バンクののぼり旗17本と横断幕２枚を設置しました。場所は小田原中継所のかまぼこの鈴廣さんの敷地と箱根宮ノ下のカフェです。新春を祝う雰囲気に全国が包まれます。しかし、病室でドナーを待ちながら正月を迎える患者さんたちは、何を思い病室で新年を迎えるのだろうか？そんな考えが頭をよぎり、傲慢かもしれないが、ドナーを待ち続けている患者さんを応援したくて始めた活動です。翌年からは、全国協議会が主体となり、神奈川・東京・埼玉・千葉のボランティアが箱根路に集結し、のぼり旗を手にしました。

チャップリンは映画の中でこう言っています。『人生に必要なのは、勇気と想像力と少しのお金だ』私は、ボランティアが集まる公的な席上で「もしも、自分が患者さんの立場だったらどうだろうか」という旨の発言をすると、ある方から「その発言は、脅迫だ」と怒られたことがあります。私は脅しているわけではなく想像力の話をしているのだと思いながら、面白いことを言う人だと感じながらも面倒くさい人だと軽蔑しました。いつの時代にも、誰かが何かをやろうとすると、何かにつけてケチをつける者が出てくるのは世の常なのですが。しかし、その人も患者救済を心から願い、様々な活動をして発言していたのだということが今では分かります。

2005年４月に骨髄移植医療を取り巻く環境の中で、一つの変化がありました。それは、プルデンシャル生命が打ち出したドナー・ニーズ・ベネフィット（DNB）というサービスです。これは、骨髄提供のために入院するドナーに入院給付金を支払う制度です。これまでの制度だと、給付金を受けられる人は、病気やケガでの治療のために入院をされている「健康でない人」に限られていました。ドナーに選ばれた人は、誰よりも健康体の持ち主です。

ドナーに入院給付金を支払うためにはルールを見直し制度を変えなければなりません。名古屋で勤務する一人のライフプランナーが会社に掛け合い金融庁を動かしました。様々な困難や苦労があり簡単に話が進まないことは容易に想像がつきます。時間はかかるが辛抱強く要望や陳情を続けた結果、制度が変わりました。当時の金融庁の担当者の英断にも感動を覚えます。

ドナーに選ばれる人たちは、サラリーマンや自営業、学生に主婦と仕事も生活環境も様々です。自身の意志や思いとは関係なく、職場を始め周りの理解は千差万別です。（今では、ほとんどの大手生命保険会社でDNBのサービスが行われています）このDNBサービス開始にあたり、プルデンシャル生命本社で記者会見が行われました。私は移植を受けた患者さんとともに体験者としてDNBの意見と感想を求められ、壇上の末席に座っていました。私の隣にいた女学生の元患者さんは、100名を超える記者の前で言葉にならず、ただただ泣いていました。その姿は会場にいた全ての人達の胸を熱くしました。堪えようとしても私も涙を流していました。

会見の後で、当時のCEO三森さんから骨髄提供や患者さんの置かれている状況、ボランティア活動について尋ねられました。私は箱根駅伝の沿道で、お正月を病室でドナーが現れるのを待ちながら過ごしている患者さんに、誰かがあなたを応援しています、諦めないで希望を捨てないで下さい、という思いで骨髄バンクののぼり旗を手にしていることを話しました。すると三森さんが「俺ものぼり旗を持つ。社員にも声をかけてみる」と、仰ってくださいました。とても驚きました。

次の箱根駅伝の沿道には86名のプルデンシャルの社員とご家族が、会社で制作した骨髄バンクののぼり旗を手に沿道に立っていました。その上、参加した人数に対して一人に一万円のマッチングで患者支援基金に寄付までしてくださいました。それから14年が経ちましたが、今では300名を超える社員やご家族の方が骨髄バンクのボランティアと一緒に、お正月を病室で過ごされる患者さんを思い、新春の寒空の中でのぼり旗を手にして応援しています。

いつの日か全ての患者さんが、笑顔で新年を迎えられる日が来ることを願って止みません。

患者からのメッセージ

第二の人生のはじまり

Message from Recipient

石井　希（静岡県在住）

私が急性骨髄性白血病になったのは大学３年の１月、年明けすぐのことでした。

年末ごろから何度か高熱が出たり食欲がなかったり、なんとなく体が弱っているなとは思っていましたが、まさか白血病ほどの大きな病気だとは思いもしませんでした。病気がわかったきっかけは膀胱炎でした。ひどい痛みで病院にいき、そこで受けた血液検査で血小板が異常に少ないことがわかりました。翌日病院の先生から何度も電話があり、すぐに入院とのことでした。

白血病だと聞いたときは今後の治療のことや治るのか？という不安よりも「大学どうしよう、部活やめたくないな」「彼にもあまり会えなくなるから嫌だな」といった気持ちの方が強かったです。あまり実感もわかないし、どんな病気なのかも詳しく知らなかったからかもしれません。

治療が始まってからも、毎日その日のことでいっぱいいっぱいであまり先の不安を感じている余裕がありませんでした。それが逆に良かったように思います。抗がん剤の副作用は吐き気が一番つらかったですが、周りの支えもあって精神的には落ち着いて治療することができ半年後、寛解状態で退院しました。

しかしそのわずか４か月後に再発してしまいました。最初に病気だと聞いたときよりも、再発したときのほうがショックが大きくて今更ではありましたが急に「死」というものを身近に感じました。骨髄移植を受けるか死ぬか、どちらかしかないことも恐怖でしたし、移植すれば本当に助かるの？という気持ちもありました。実際移植しても助からない患者さんは大勢います。

そんな死ぬか生きるかの骨髄移植を乗り越えて、一番に思うことはやはりドナーさんへの感謝の気持ちです。どれだけ勇気のいることなのか、ありがたいことなのか。ドナーさんの負担についても十分理解しているので、名前もわかりませんが本当に感謝しかありません。彼女のおかげで私は今も生きています。ドナーさんのおかげでこうして元気に生活できていますが、再発する可能性もひどいGVHDが出る可能性もあります。だからこそだと思うのですが、移植をうけて生まれ変わってから毎日に感謝して小さいことでも幸せを感じるようになりました。これから先のことはまだわからない。でも移植した日から第二の人生がはじまりました。大げさじゃなくて、私の中にはドナーさんの血液が流れていて、血液型も変わって、新しい自分になったとすごく感じています。

実は発病する前は、部活中心の生活を送っていて大学の授業もよくさぼっていました。病気になっていなくても４年間では卒業できていなかったかもしれません。将来のことをきちんと考えたこともなかったし、あのまま大学生活を送っていたら今頃どんな仕事をして、どんな生活をしていたのだろうかとふと思うことがあります。それなりに楽しく頑張っていたのかもしれないけど、目標をもって行動し、たくさん幸せを感じている今の方がきっと幸せなのではないかとも思っています。また、病気にならなければ関わりのなかったであろう方々とも知り合うことができました。毎日が幸せなこと、新しい出会いがあったこと、ほかにもたくさんうれしいことがありました。だから白血病になったことでプラスになったこともたくさんあったと今は思っています。

病気になってからは、退院する、復学する、卒業する、と少し先の目標を決めてきましたが、卒業の次の目標は「就職」することでした。移植を受け、免疫力の低下からすぐに熱を出したり長時間動いていることがつらかったりと普通に就職することは難しいと思ったので、市の就労支援窓口に相談し私の病気を分かったうえで雇っていただける会社を探しました。今は周りの方々のご理解とご協力のおかげで時間を短縮して事務の仕事をしています。正社員ではありませんが、私にも働くことができるという自信になっているし毎日新しい知識がついて楽しく仕事することができています。

また仕事と並行して骨髄バンクユースアンバサダーとして活動をしています。骨髄バンクユースアンバサダーというのは10代から20代の若者の、骨髄バンクサポーターのことです。私がその第一号として活動し、若者にもっと骨髄バンクや移植について知ってもらう、そして私と同じ立場で活動してくれるサポーターを増やしていきたいと思っています。病気になった私だから伝えられることがあるのではないかと思い、ユースアンバサダーとして、語り部として企業や大学内で講演を行っています。

私にできることはドナーさんからつないでもらったこの命で、ほかの人に命の大切さを伝えていくことだと思っています。「いのちのバトンをつなごう」この言葉をテーマにこれからも活動を続けていきたいです。そして私が今こうして元気に活動していることが今まで支えてくれたたくさんの人への恩返しだとも思うので、これからも前向きに生きていこうと思います。

心のこもったご寄付ありがとうございました。(2018.10.16～12.15)

櫻井康司さん　10,000円／大谷巻枝さん　5,500円／奈良誓夫さん　3,000円／田井潤蔵さん　3,000円
中谷哲郎さん　10,000円／笠 優子さん　10,000円／匿名　13,000円／福永達子さん　3,000円
土肥久美子さん　3,000円／増田 剛さん　1,000円／マルゼン　5,810円／中川里枝子さん　2,000円
大沼ふじ子さん　10,000円／五味優美子さん　1,000円／東京港南マリーンロータリークラブ　168,510円
大貫洋二さん　5,000円／櫻井正和さん　3,000円／山﨑裕一さん　5,000円／竹崎恵子さん　5,000円
佐藤淳子さん　2,000円／丸尾悦子さん　10,000円／南川英則さん　3,000円／河村朝子さん　10,000円
匿名　10,000円

お寄せいただいたご寄付のうち、会費未納の会員からは会費(年3,000円)を差し引いて掲載させていただきました。

▼iPS細胞を実際の患者に使う臨床応用が目、心臓、脳神経に続き、血液にも広がっています。京都大学ではiPS細胞から止血作用のある血小板をつくり、再生不良性貧血の患者さんに輸血し安全性や有効性を確かめています。今後、iPS細胞による血小板製剤の製品化をめざして治験を実施する計画を進めています。献血者は2017年度で473万人とこの20年間で120万人減少し、安定供給のための477万件に届いていない現状があります。また輸血でつくられる血小板製剤は使用期限が採血から４日間と短く、長期間の保存が難しいという問題もあります。献血の重要性は変わらないながらも、iPS細胞由来の血小板が実用化されれば不足分を補うのに期待できます。献血に依存している医療現場に与える影響は大きいと言えます。

▼同じく京都大学では、iPS細胞から神経細胞をつくり、パーキンソン病患者の脳内に移植する治験を実施したと発表されました。パーキンソン病は脳内で神経伝達物質ドーパミンを出す神経細胞が減り、体のこわばりや手足の震えが起こる難病で、国内患者は推定約16万人、根本的な治療方法はありません。京都大学が備蓄する拒絶反応が起きにくい型の他人のiPS細胞からドーパミンを出す神経細胞を作製し、約240万個の神経細胞をパーキンソン病患者の脳の左側に専用の注射器で注入しました。これにより減少したドーパミンを出す神経細胞を補うことを期待しています。半年間の経過観察ののち、もう片方の脳にも神経細胞を注入し２年間経過を見守る予定です。

▼また慶應大学では、iPS細胞から作製した神経幹細胞を損傷した脊髄に移植して機能の回復を目指す治験がおこなわれています。脊髄は損傷すると、運動機能や感覚が損なわれ自然には再生しない組織のため、失われた機能を取り戻すことは困難ですが、iPS細胞があらゆる細胞に成長できる性質を利用します。けがで脊髄を損傷し運動機能や感覚が失われた患者に、治療効果が期待できる負傷後２～４週間の間に神経のもととなる細胞を作って移植、体内で神経細胞や神経の働きを補助する細胞へと成熟させ、神経の再生を促すことを目指しています。脊髄損傷は年間５千人が新たに患者となるとされていますが、患者会では「手や足が少しでも動かせるようになるだけで生活は大きく変わる」と再生医療に期待しています。

▼全身の筋肉が徐々に衰えていく難病ALS（筋萎縮性側索硬化症）の治験薬開発では、患者のiPS細胞から病気を再現した神経細胞を作り研究に利用しています。その細胞に1,232種の薬を試したところ、パーキンソン病の薬として使用されている「ロピニロール塩酸塩」が、異常なたんぱく質の凝集による細胞死を抑え、細胞の重要な器官であるミトコンドリアの機能を正常化させることが解り、ALSの治療薬候補として、慶應大学が12月より治験を始めると発表しました。

▼以上のように、iPS細胞に関する研究は、いろいろなところで目覚ましく進んでいます。拒絶反応が起きにくいHLA型を持つ骨髄バンクのドナー登録者に協力を依頼している「再生医療用iPS細胞ストック」もこうした研究の成果につながっています。今後も、特に若年層のドナー登録者を増やし、未来の医療の発展にも寄与できるよう努力いたしましょう。

(A)

ご寄付と会費の納入、そして絵はがきや書籍・テレホンカードの購入は郵便振替にてお願いいたします。
皆様からの善意をお待ちしております。

ボランティアの運動にも資金が必要です。東京の会に活動資金のカンパを！

郵便振替口座番号　**00100－1－555195**
他銀行から振込みの場合　ゆうちょ銀行(9900)　／〇一八支店(018)　普通口座№4180512
加入者名義　**公的骨髄バンクを支援する東京の会**